

◆学術活動

戦争・対立から平和へ

戦後70年記念国際学術シンポジウム

千葉商科大学教授 趙軍

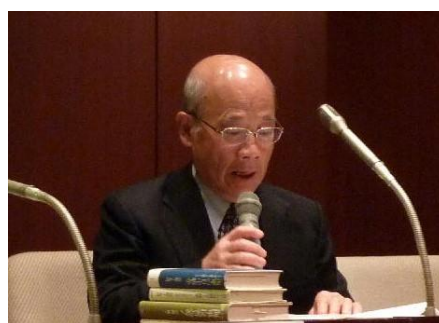
2015年11月21日、日本華人教授会議主催、中国社会科学院近代史研究所『抗日戦争研究』編集部と台湾中央研究院近代史研究所蒋介石研究群協賛のもと「戦後70周年記念国際シンポジウム」が開催された。「戦争・対立から平和へー歴史研究の現場からのメッセージ」をテーマとし、千葉商科大学(千葉県市川市)国際会議場において行われた。千葉商科大学、法政大学、駿河台大学、大東文化大学、岡山大学、横浜国立大学、福井県立大学、武蔵美術大学、早稲田大学、信州大学、日本中央大学など日本各地の大学や研究機関の研究者、さらには北京大学、南京師範大学、中国社会科学院近代史研究所、台湾中央研究院近代史研究所、華東師範大学などの中国大陸、台湾の研究者、また歴史愛好者及びマスコミの関係者など70余名が参加した。

開会式において、日本華人教授会議代表、愛知大学李春利教授はまず、開会の辞を述べた。李代表は、日本華人教授会議の近年の活動を紹介した上で、今回の国際シンポジウムは先日10月12日東京大学山上会館で行われた特別講演会と同様に、いずれも日本華人教授会議が戦後70周という重要な節目に当る年に企画した学術活動の重要な一環であることを説明した。千葉商科大学島田晴雄学長は海外出張のため日本にいなかったが、今回の国際シンポジウムにビデオメッセージで参加した。



島田学長は、今回のシンポジウムの主旨を高く評価し、健全的・平和的な日中関係の構築は、目下と将来にわたる日本外交の最も重要な課題の一つであると強調した。

開会式の後半では、笠原十九司都留文科大学名誉教授が「戦後70年にして問う海軍の日中戦争責任」をテーマとして、基調報告を行い、これまで学会にあまり重要視されていなかった旧日本海軍の日中戦争における戦争責任問題を提起し、その実態を検討した。



その後のシンポジウムは、第一部から第三部まで、15名の研究者が「歴史研究の現場から見た戦争と平和」「“抗戦”時代の中国経済と外交・辺疆問題」「歴史研究と“歴史認識問題”：戦争をどう乗り越えるべきか」という三つのテーマに分かれて、多角的、多方面から日中戦争及び第二次世界大戦の史実、資料そして研究現状とその問題点などをめぐって、活発な研究発表と建設的な議論を繰り広げた。

第四部のパネルディスカッションでは歴史研究と現実社会の結びつけに重点を置き、「新しい時代の日中関係の構築に向けて」をメイン・テーマとした。パネリストの天児慧(早稲田大学教授、現代中国研究所所長)、高士華(中国社会科学院近代史研究所研究員)、久保亨(信州大学教授)、姫田光義(中央大学名誉教授)、王智新(本会会員、星槎

大学兼職教授、早稲田大学教師教育研究所招聘研究員、華東師範大学中日職業教育研究センター副主任) など5名の研究者は、歴史問題を背景とした現段階の日中関係の諸問題及び今後の展望をめぐって、それぞれの見解を披露し、鋭い問題提起も行った。

天児慧教授は、現代の日中関係はある程度の改善が実現されたが、まだ楽観的に見ることができず、実力面での対力比関係が大きく変わってしまった現在、互いの長所と短所を見極め、互いの協力していくことが今後の日中関係にとって最も重要なことではないかと指摘した。久保亨教授は、戦後70年関連の安倍談話は内容の面において隣国の反応を配慮した形を取ったが、日露戦争のアジアに対する影響や対中国戦争の中国民衆に対する危害などに触れておらず、やはり多くの問題を残している。歴史研究者として、これらの問題の解釈を政治家に任せることはできない。また、大学入試の際、世界史を選ぶ受験生がますます減っており、青少年に対する歴史教育も強化しなければならない仕事であるなどと述べた。

シンポジウムの主要招集者の一人である本会会員、趙軍千葉商科大学教授は閉会式に総括発言を行った際、今回の国際シンポジウムは日中戦争史、抗日戦争史の研究において、新しい進展があったとコメントした。具体的には、旧日本海軍の戦争責任問題、当時中国の「解放区」・「淪陷区」及び辺疆地区の経済実情・社会的変化状況、「偽政権」・「偽軍」の存在状況に関する研究、日中双方が欧米諸国との間の多国間関係、当時の中国とソ連との関係など各方面において、新しい資料を運用して、新しい視点と新しい見解を提起した学術報告が多数あったことに現れていると述べた。さらに、日中戦争中における加害者としての日本側の戦争責任問題や一般日本人民衆の歴史記憶と歴史認識問題についても、日本人研究者による新しい研究業績が披露され、日本でこのような国際シンポジウムを開催する意義は、まさにこのような学術的な貢献がなされる場所にあると強調した。

今回のシンポジウムに先立ち、日本華人教授会議は2015年10月12日午前に東京大学山上会館の大講堂を借りて、「特別講演会：戦争・対立から平和へ—歴史から汲み取るべ

きものは何か—」を開催した。前半では中央大学名誉教授姫田光義によつて、「「侵略・植民地化・加害の責任」をどのように果たすのか——中国帰還者連絡会の信念と活動、およびその継承運動から」をテーマとする講演が行われ、「中国帰還者連絡会（中帰連）」という特別な組織の戦争反対運動と日中友好運動への関わり及び彼等の活動の次世代への受け継ぎの現状が紹介された。



後半では本会会員、早稲田大学劉傑教授が「戦争と外交——一九三〇年代の日中関係」をテーマとして講演を行い、知識人、文化人、大学関係者などの言動を通して、1930年代の日中関係の諸方面の実態と特徴を紹介した。両講師の講演の後、本会会員、大東文化大学鹿錫俊教授と同じく会員の桜美林大学李恩民教授はコメンテーターとして、講演の内容を高く評価し、一部の問題点などに対して質疑を行った。なおこの日の特別講演会の司会は趙軍教授が務めた。

(敬称略)

『中文導報』と国内マスコミに掲載された中国語版紹介記事：

日本華人教授会议主办纪念战后70周年国际学术研讨会

2015年11月21日，由日本華人教授会议主办，中国社会科学院近代史研究所《抗日战争研究》编辑部和台湾中央研究院近代史研究所蒋介石研究群协办的纪念战后70周年国际学术研讨会“从战争、对立走向和平——来自历史研究现场的寄言”，在千叶商科大学（千叶县市川市）国际会议中心隆重召开。来自千叶商科大学、法政大学、北京大学、骏河台大学、大东文化大学、南京师范大学、中国社会科学院近代史研究所、台湾中央研究院近代史研究所、岡山大学、横滨国立大学、福井县立大学、

武藏美术大学、早稻田大学、信州大学、日本中央大学、华东师范大学等等中国大陆、台湾和日本各地研究机关的学者以及历史研究者、学术界、传媒界等 70 余人参加了本次研讨会。

开幕式上,日本华人教授会议代表、爱知大学教授李春利致开幕辞,祝贺大会开幕,并介绍了日本华人教授会议近年来的活动,并说明本次会议同今年 10 月 12 日在东京大学山上会馆举办的特别讲演会一样,都是日本华人教授会议为纪念战后 70 周年而举办的学术活动的重要一环。千叶商科大学岛田晴雄校长当天虽然在海外考察,也为这次会议送来了视频致辞,高度评价了此次会议的主题,并认为构建健康、和平的日中关系,是当前和今后日本外交的最重要的课题之一。

本次研讨会开幕式上,都留文科大学名誉教授、著名历史学家笠原十九司做了题为《战后 70 周年之际追问日本海军在日中战争中的责任》的主题报告。接下来的四场分会,分别讨论了以下主题:“从历史研究的现场看战争与和平”;“抗战时期的中国经济与外交、边疆问题”;“历史研究和历史认识问题:我们应该如何跨越战争”等。15 位学者在会上以学术报告的形式,阐述了自己在上述领域和课题方面的最新研究成果。最后一场公开讨论会以

“如何构建新时代的日中关系”为题,邀请天儿慧(早稻田大学)、高士华(中国社会科学院近代史研究所)、久保亨(信州大学)、姬田光义(中央大学)和王智新(华东师范大学)等五位学者,就当前和今后中日关系的敏感问题和重要课题畅所欲言。天儿慧教授认为:当前的

日中关系虽然有所改善,但不容乐观;在力量对比发生了变化之后的现在,互相认清对方的长处和短处,相互扶助,是今后最重要的事情。久保亨教授则指出:安倍谈话虽然在内容上顾及到了邻国的反应,但是没有涉及到日俄战争对亚洲的影响、对华战争以及对民众的危害,仍然存在着很多问题。历史学者决不能听凭政治家来解释这些问题。大学入学考试中选择世界史的考生越来越少,今后应当加强青少年之间的交流。

本次会议的主要召集人之一、千叶商科大学教授赵军最后的闭幕式上做总结发言。他指出:本次学术研讨会首先在中日战争史、抗日战争史的研究上取得了新的进展。如日本海军的战争责任,解放区、沦陷区以及边疆地区在抗战时期的经济状况、社会变化,关于伪政权、伪军的研究,关于中日双方同欧美各国之间的关系以及中国同苏联之间的关系等方面,都有学者提出了新的材料和新的观点。对于中日战争加害方日本的战争责任和日本民众的历史记忆与历史意识问题,本次会议也有几位日本学者提出了新的研究成果。这也是在日本举办这样的学术会议的一个重要意义所在。

本次学术会议的有关论文,今后将由《抗日战争研究》编辑部择选发表。

(于瑶、赵军)

